雲州相語第十二
特別
リ5
12960
12

平家物語巻第十二目録

建礼門院出家

平大納言被流

判官都落

泊瀬六代付六代被切

灌頂巻

女院隠れ

大原御幸

灯生

大地震付鎌倉

大仏殿被転

六代

大原入

亡霊


小汀氏藏書

58 2071(7)

宮城県図書館



ゑ祖よりかゝ三位中将重衡卿をゝ猶野伊ゆ
ゑ以新きゝまゝて玄度より伊豆國よりおゝて
を新ゝ南部の大庄頻ゝ中ゝれいゝゝゝゝ渡
さゝゝゝとゝて源三位入道の孫伊豆義人大
文殊道ゝ作てゝゝゝる奈良へゝゝゝのはゝ
まけゝゝゝ愛ゝゝゝゝゝの中へゝゝいまゝられ
を大津ゝゝゝ山科ゝゝゝゝゝゝ醍醐路ゝゝゝゝゆ
けゝ日ゝゝゝ近ゝゝゝゝ者ゝゝゝゝの小方とゝゝゝ島
御中ゝゝゝ惟奏ゝゝゝゝゝゝゝゝ又ゝ大ゝゝゝ國綱の

て岩子と弟の法師と大網を仕掛てとりけ
る中将一番にして生捕まゐらせ給ふのちを
と弟は法師をいつくしくとりこめ壇浦に
て海かしつこを引くはのうちをすくはの
けなさこみとりつまして舞墨まうをの乃大
夫三位は因幡にして日暮せいふ所のうまし
まりけるを三位中将は毎の食事のまをは
然けてつるこきこ取り給ひすときくのてい
うかもて今一度うとらの浦ゆみもみ
こもやと思ひてまうれ者ともうれも叶

つすたくなくなるを小乃殿みなくてあり
くくを給ひをり三位中将も護乃武士を
は並ひけるまほしをのくれ給ひのう者志
れもけるうなにうをを又うれけを
いつ一度流後は筆思義をたはあをり我
を一人れ子なを行くうの世は思ひをく事
なし遂来契らをしし女房の日暮といふ所
かりとくくを一度面して後生の事を
もやうをやと思ふをいふと言へし武士
を岩本なりけるしみ海流いて城は女房

なとは清華ハなふうくるしうへきとう
とうやてゆうきるこ佐中将斜なるを
奴ひ大油を佐房のうまてハ清わらとゆや
らん只今三位中将殿のなるへ清とは至は
う立ゆう清見来ふいくひとゆや人をいれ
ていとまきるとそれをふいつやは
つるとそうを出てみ清へを藍摺垂毋
物烏帽子きるる男乃屋をくろみるる掃
ようをるそうれ至けるやは清簡れき
もちうをいてくりのうやうよ参りやう

佐うを見へ入夕と言ひたる清盛を守
ふる清きてこ只さそれたつ畑を源なり三
位中将見を物のつき泣く言ひたるを西國
をそりのうをなる見つを方乃生ゆる因
をれて京種金砂をさるすけをからんて
を面部の大宿のを へをまきて来るを
しをて所を以為から尽して今一度ひ見
をふこともやと為に清るをを踏ほをも
うををよりひをくこをなる出乱をゆる
みを接をもをるへうをもりくるを方よ

所成てゝ人ゝ力なりすとて新の機を引か
ゝのをうゝ和をすゝうゝひきつてきれを
新見る清流きよとてうつきたれいかのかゝ
日乗知て清のなうおほゝけうるとゝ一入
おもひ乃多うまきられたる白とて小方か
みさをゝさうへてゝ水ゝ麻ゝ三位のうへ乃
ね新家三位のうへ乃やうる水ゝ麻ゝを洗
ひへうるとしつきまうゝうはをるたせぬ人
ともまうさつうゝかうぬすうたとと
一度みもゝうゝたうゝやと思ひてうゝ清あゝ

ゝふまてもはゝゝ色をたまゝ今まてはゝゝ色ゝ
清るもゝやゝ思ふなのをもゝうゝ油を
さてをゝふ紅ゝ色るうてはゝまゝん事
ゝとて為いゝ代事を言ひかゝるとゝ清をて
もたゝ代ゝ示をぬものをなみをなわかあ
まるゝ清姿の色ゝ代をゝふゝるまゝの
色をゝとゝをのゝ小袖小浄衣紅ゝ人てか
さまゝゝ中ゝ二まゝを笑ゝ色清ゝ日ゝゝき
ゝひゝゝ密衆をゝ新見る清流ゝゝとゝて
をの色ゝれを小宮ゝうまもさるゝとゝて

ふるこもちのなき事の江ようなりさ世
れ叫くみまそ作へとそ清水をかきたり
中将なくく一首乃方そそうさのふ
きさうひてなみされうくれうころも
乃ち代叫くえそ乃ぬふうをぬる
和歌の道事乃
ぬ美ふふ子ころもくとそなふのそん
たふ城ひきちの叫くみとおをつし
行さまそひきまひたをくむうくを一遍
うと初詠へ日もたきぬ奈良てもとれう作

歌とも乃結ら年をくんなくとそおられけ
きとし和歌中将れ被るすうをりうやたと
しまて引ぬあ詠へを中将んれうをを
唯ちをつる詠ふてしさきとも弱まそなの
らへをつをかをまをあくまとて思ひ切て
そおられけう城る世れを逢みんうやも
芝そ弱つとと忘をれけきや今一度たちうり
くを思つまけきとをもむよをうてそうる
をとて思ひ切てそ出られる小方を詠
篇れ不まて酒乃ひおなをきちをひぬそれ

法こゝの門の外まで遠ゝ送られ中将源
よくれて行さるれを見くねと詞をもちまま
ちやめ給りすゆ中ゝなり者る思条の時と
とそうやしうそ思ひられけるかやうてを
しるを出て おゝ わへうと おもられ者まを
うれもちをうなれとうつりくそ外めふ
さるほと 丹南部の大宿之住中将清取をて
いつくへとて 会議を拵ふの主御つを大犯
代西人うる上 三千五刑代中るをもれ給
因感果代為理極成き り 佛敵法敵代逆臣か

拵て頗ふる東大寺奥福寺あるの大垣城田
らて 源頼すやすゝ きゝ又のときらてや切
へそ中会稀を老僧ともの会議をけるをう
れを僧徒の法をを捉役なるをたく者之る
なふて 木津の通うてをてとてはる
ま者士の多へうをきまるる武士をうけ
変て 木津河代ちるて 沢る新をらんと
なるる数子人の大宿る 諸代武士みる人幾
千茅といふ数代之すちくふ三住中将の
住ふ本之住る先知河といふ者ならい条安

仮ないろ〳〵家族を見まもむとて親とおもてそゝをうを学ひすてる新まらんとしけるを所不絶仏法ていうきるとわ死て切るを義ひとの立かたうふる中を推分〳〵三位中将入洛そゝちのうまて忘所とう家族はゝ自ら来てとうへとゆれい中将志代ほと孫る神母なりうを遣用うを流弘る仏ことおうをまををくれやと思ふをいのうと言へし知所やをていりとの洛ることはやてる護の義士るゆとうをて遣うる仏を

一祈りの色をて出来たり奇ふ仏をさて
そまくけう河原のいきうの上うをへ
まわ知所の猫衣入神をとりて仏の洛を小
うき中将ふひの色さを為る中将られをひ
う色ほく仏ふ向ほてゆ中遣ゆるをつゝへ
きく祖をう三遣をほくるい百義入至数を
壊をしゝを絶ふを天至如来の紀別小新ふ
不化代義来まことふ物のしゆい色とを至
者ふ位遇をゝ遣源くちすして還て得為代
因とな入誠ふ主御の遣義をうすること全

恩を人倫に報ぜんことを存
するゆゑなれば生をうくるものの必たれの命
を惜まん命をたもつ者誰か生命を惜まん
ふう道といひ芸といひ辞するに所なし理
非仏陀の昭鑒より抑飛揚たちまちに
ひ運命をくるふことを後悔すべ
始てもれあらんや仏三宝の恩界を
蒙始をあつてむとするゆへ小海渡代后弘
まろうくなり唯念教を通所光明
より給す一念弥陀仏即滅無量罪ねのつくを
逆謗ともつて必弘とし乃最後の念
仏ふるつて九品往生決定してそうひ紙
をしてそうこをきうまけりる日来の悪行をさる
事なれども唯今の清貧捨紙みをうる数十
人代大唐の護代教主を皆縁乃袖をそぬ
らけう新をし般若の門代ふか訂作者
ようう然らをれ方をまぬる法師の合
数乃内こにおたつて伽藍代所乃切のひ
あるてねとそさこうかあ大袖を作敷た
ひ首をうこうねる紙ともひくろを作る

めて拝をきてうあるらんあるようをて孝養を
ひとて興を迎まゐらのすけるもむしろを
きて重なるなれを見をとりて興よりて日
暮へういてうゆをけるゆくしうなをせうのせ
なれをもしのあるぬさ海みなわあひぬ見
を待清て見給ひける小方乃んたうをて
ちのられて義なわさてしもあるつをの事
なるねを色ちうを法界へ入まりきき
侍をのくらひのくれることを法佛乗いとな

みのふそめつまなる新なを大佛の至後家
坊ようのう寺へを大宮を元て日暮へう
法のつ寺をるうひを源も姫よなり骨をを
高野へをくを墓をを日暮うをうきける
小あやってを海をうを色濃是深るやたきを
てくは後世業拝ををふらひをふを者なる
さうを祖丹平乱之ひ源氏代る滅て乃ち国
を国月小法ひ法を外を乱のまくなわきを上
下安拝ををくを祖小円七月九日午刻計
大地ひひたくしう動いくをくひさく海線

北国白河院ほとりに皆破れくつる九重の塔
をうへ二重ゆるぎ破れ長寿院を三十三間
北洞堂を十七間まで少りうす宮殿をは
て生く所々の神社佛閣あやしの民屋さか
うる所あれくつる所所数知らず雷の音をも
あつる所雲をふる事不可説うて日
の光も見えず老少とも驚き怪き
心を出せる又意國近國もかくのごとく山を
崩して河埋うれて海深ひく浪をひさす渚
あく舟を渡よゆられ陸行駒やあれたて

とは失へる大地ひきて水涌き砂石ひきて
谷へまろぶ洪水みなぎきり来らん事疑て
こなたの助りなむ猛火焼来らん河を色
あてくもたもしをさらぬてしるよりなし
彼こそ物の命を明くを訪るあるくされを
書すを上皇かたくうるをうるをなるを
大地震なり白河京中二はるおうつま
るく者いくらとしるし数をしらす四大経の
中に水火風を常に言をおきやも大地か
をひてをあやをなる変をかりとを変そもの

う殺つて生をとて上下遣戸障子建立て元禄
なりちかうあく度あつまりて拝らん念佛申
なりきさそふこと却ひたくしい九十七
八十の老とまく老の滅るなといふ事い
老のなりひなれとまもちとの明るをとを
心はをうまものをといひれい臺部ともを
見弘字てれりあさけひまを法皇を新熊野
へ清華成て清花寺さ勢ゆふ野ゆ明ら
大ちちんををちよりを出さたれいう系
清興ようく六系没へ墨ゆなら清徳乃乙

つ没上人為をうくいりりるを乃んをのるを
うきをん法皇を面意ま怪屋を立てをおて
ますを上を風聲ようて法れけへめ寺
なら清水清寺みゆを為きれを女院宮
宮を清車ようを法水へ行ら為を文又
博士いうき四意へ祀寺夕さをいれの別
ようを大地丑おをすへきう中けまをおう
ろるををろうなり為又徳を皇新御三
後三月八日代大地震をを東大寺代佛の清
歌をゆをれとをるをけるをのやをを堂二

廿二日のたちたんまを主上法敎を去
て清寧後乃帝より五文乃幡遠江てはたら
まし巻くとて取とられ上代なれは
うくうきんき様もうやうれことあるを
しまをたほくを十善帝王帝都をおさを治
て清方を海産よりつめ大臣乙郷とられ
て舊墨より色を武を取をもて大路行渡
さる或を書子より引れて遠流をうるを
の怨霊をてをのうをつからゝ中あまをん
ある人の歌をうるゝまあをなのつをなり因

八月廿三日ゝ雄文を坊おたる歌義朝のう
ゝつさうう色とて出て歌ゝあ紅
因ゝ果の新をゝ者子をのうくひゝ紅さを実来
へうゝ下られけうをめる法華経を七月ゝ孫
報恩すく弟中さんのたゝかをうくゝろなる
觸觸深一白ゝ布ゝ法ゝ出てをうまをけ
新ゝ程なくを新討来て一向ゝの首と信を
られける而下を又弱ゝうくてを下られけ
ゝ光を勢ゝ人遠来ゝ法ゝのゝれをる繊撫
の男平治ゝ後を撫舎乃あれ若乃下ようけ

もれて侍をふらふかを人をなつかしうを時の
大理まのひまの中清水たるいく岩乗佐角
を海人て侍すれとも未なのもしき人か
きしたつのもとをうれとて東山
慈覚寺といふ所まのうをこめて亜たり
志を慈覚の称いくしてひまうきの
ちうさの男ともおくしてそ下られを
ふひ里をふ沈る頭金へ入とさこそか
て源二位お捜河のもとまて沈遅まを
きうきまうるを此梁かたつてうさくく

色河いくるを生をて大家まを立ちうを方を意まを
立て父の首持取沈ふそ義なるを見まを
大石小石皆神をそのうきまたるを石巌のさ
ーさ狩伐掃て新なる道場を造文沈
為と仕業して勝長寿院と号ふ乙亀を
をうやうの事をを手ちうく故左馬頭
義朝の墓へ向大居ニ位をくくふ勅使
を左少弁兼忠をを中をし新知つ武勇の
乙芸長をるまのて者を立亀を奥をけを
なくを父首吳贈度賜位を及ぬるをを

叛くられ九月廿二日平亂代鎮壓の部よりは
諸國さへ清のもさるるつゝ世種金沒ようと
亂へ中さまるらるれいさゝを遣はせ給て
とを乎大洲を時忠卿紀伊國鷲頭信基上総
国讃岐中將資盛兵部少輔正明伯耆
波國二位僧都尊親河波國伯耆紀國
伯濃國中納言資師忠牧を戎義國とをさゝ
ゝ城を西海代波のうへ戎を東國の意代
つゝを遠いりをを引をす後會を引をゝ
を列の海を押へ清ゝ面くゝ部うまきんゝ

推量られて義なり中ゝを乎大納言時忠
つを遠礼門院のゝゝをゝ吉田小系ゝ中
さまるゝを対忠ゝうゝ世おもうしてゝ
すゝを配所へ部ゝへ最後の清盛中さんの
たゝ小殿人をまをゝ乃ゝゝまをて系て
は用部代中ゝをゝ清ゝゝ里の清あゝて
をも取ゝまゝうゝ存ゝへ生命ゝ清
又りのなり清を指ゝもゝてゝまゝを給
位ゝんすゝんと思ひをゝをいゝをは丹ゝう
文ゝ行ゝゝか室も知ゝゆまゝうゝへとゝさ

まゐれば女院けるもむかし人餘波とてあそ
こうるとうかりけるとをはとりあ同坊ふ
人もたまつのをかるへくかとて源氏をあへ
さ勢語りす世阿忠つとゆ出羽お日奥信
う孫贈左大臣時信の子なわそう金土宜
の清外戚故建春門院はれ清盛とえ入道お
國乃小方い条二位殿も婦まそおけ
兼友兼親卿ひのことをんのうさ
正二位大納言ほとなく強上て換地遠
後代約束うと三ケ度まなまて成り人はれ

の廉勢代阿弥祇園の窃盗強盗山賊海賊か
といふやうなるもやうこなくうく発覚
て財宝うをかつとおさまりきりく遠ちれうる
さまを兼約束とう人中なる主上并る三種
神祇ことゆへなう都へ入まとと西國
色作下さまけう院宣乃清使花形のつかか
源氏といふやいた新しけれうも海
るもの時忠卿乃志るをなわ遠春門院い
清かくみうを清盛をまほうおほくめと
れけまともかやう乃恵物まよりて法皇清

憤懣のうす刺激もたゝるようなる事ならばけ
擬を捨てよやさまはけまとも附ることして殺
る流行きのひまをこの見物流行の前兆として生活
十二月なりもふそをもられを流行ることもれて
叔父時光の乃評かおりうりの時るるを
大洲をれ商所かれをして毎上帝紙汲とも
よ大洲をの秘まるすうるを仮を乃餘波紙
う打ちまれる大洲を絶るをまるき初
うをと心ほうふそを言へ ともをその対るを
なるうをちをそを始うも思られけの

を立を整欲いての乃ちの下をもつまるる
事ん蕎子をを刹をてくすをかれうやに
をを書井のようる新ていう〜をを紙ちを
少し新語れ指よ新いてるくとくる
うをふようをを志賀庚湾を賢入江文田浦
とを中をれを大洲言なくく孫しぬを紙
うををちんこを吹く田不引綱の
田をを立ちらるるなるう
昨日を西海乃波れうをるたくちひて恵湾
富芳乃根を商毋の中に稜を日を小国乃

雪乃下ようつもりて雲行殊に悪しかつ
の意よりとれらを言葉に判断をも種金敷
らりたる石十人付られ付られなりけるう間に清水不
富を富ましめと雪しるんを合せて一人
清水留下つまりたる今の只事なる上ことに
又子乃繋りをもて一谷壇浦よりこなるまで
平家を攻たほす間清水不富の清和ゆへ
なう部へ出へ来れ一ヒを結め口海を渡
を勧賞行もるつゝか所へ何乃る細をもて
叶らさらし乃有ら来と上一人ゆる下義民

に乗る色不富をなるとき長崎津國渡海して
逆櫓をてうたてしの海をしてたきるあさへ
山の櫓事を梶原逆根小思ひ者を諸言を
て逆小先ひけらとう要うう種金敷を一日
本塩代清水之よりうき討を上りくお
ちやとをを忘つまとれとも大石とも差上を
ゆを治要田の櫓をを引京部の強弓とも成
て本ーうりうをなんをりくをんゆを打を
られ来るうこにた清水清坊の後をつて和備
上て初治する様てたものつてうてと差へ

し土佐坊昌俊に所領を給はるべきよしを
らるるとて京へ入るのぼりけり土佐房郎
上らるるまでも江の口まで判官送りて
まず判官土佐房の上らるるをまつ武
蔵坊弁慶をもつて先さきにたいやうて伺
てを案ずる判官いかに土佐房鎧兜ぬぎ
文をなさうめて道へ出し新代官事もいまだ聞
ぬ文をもいまだ見ぬ間
作法をも分まて郎よ新代官の細はもあ
てまうをのよ法師と覚をはお様て給く

当様せきを法へとりやそうを作はつれとも
それを判官よりもさきめらい義経うよ上
らるはなりと云とうをさしのぼをを宇治
瑞田の橋はれを京郎の路をを成て中な
かうるなんを和僧上て物語するやうて
たもうてうてと作られたれと道へを土
佐房なかくようて只今さる法事のわうを
作ひ作へき御者郎の子細はよりて延暦
条語代たるを所上ては判官ちくを京時う
徳言よ伺て鎧倉中へ入られをを

道上をうろ〳〵事へいのまに佐坂を浮き
をいの〳〵きしくはやらんとの事〳〵まぬは
心後よをひてを金浮はゝうろ思ひまぬ
はの不思なきよりは記清文を書をんへ色世
紙中すはは寄てを南てを頭金敵のよりと
思られをふるかなゝをとをとをつてめ
外義をゝけは見く紛へて佐坂一見は
言をけのまんうるよ居ゝ七牧の記持を
書式を婚てけを或を社は寄及ゝ紛かとゝ
てゆをてうの大蓄方人者も猶し發め

てを東やうてよをんとを判者を磯禅師と
いふ白拍子う娘舞といふ女を落ををまを
寄ををつも後を立さるあやを結ふりす志
けの中けを大路を皆成者て結なる浮世を
見もゝの〳〵むよ見祖まて大蓄方者
をのさを〳〵を〳〵とやさふら〳〵のの
持をを見を記る妙記持法師のをわさと見
さふら人を遣してを見を結ゝをやをて
六をゝれ故入をれ國人の〳〵浮のれを
発を三四人の〳〵仕をまけるの二人みをふ

ほうとそほと者ちとて西らんなを中こ
ろるりっかまりとてもあものを一人み
きよ遣すすふろと掛りこ光を者人か
うっとさうの門人あ小新あせられてさ
ぬらふ者所ゆを鞭逼馬ともり立くく大幕
の内ゆそものとも縫笠矢うさ負弓押うと
甲の弦をためしとうをひとお立仕かも通
まふて代乱交とを見こいしまと中たれい判
者されをうとうとて太刀をておめ人をしつ
かきなの者て投鉦をう級りうとしてか

ぬへを馬ゆくくをいく中門のはり引たて
ふと判官見ゆおかを門あをとてうをさを
今やくくと待ゆふ所不鉦半計立仕房ひと
甲口立十騎逼門内おゆ推よをく岡沢と
ゆを紙ゆ立ゆる判官鉦ん結たちあの里大
者拝結ゆをく鉦うゆを畫軍ゆを鞭強多
たやすうおへかうのゆを日本國ゆをおほく
ぬ紙をとてをきくうを結てし馬ゆ通られ
し中やりひきん立十滝計内兵とも中沢平
てを逼しきる主猶ゆる伊豆三郎義盛奥列仕

藤四郎兼光信江田源之丞行光家義坊
弁慶なといふ一人当千の兵ともあつまり
名をあらそひ池殿より外に行方をしらぬ人
なしとぞいふなる中にも西塔の武蔵坊
弁慶ほとの判官殿なつかしく思ひ奉る七十餘箇の所
ぬけ給ひ給ふ事なりとも思ひ給へ
共をもくなうして御ほうをたる
太郎房叶つとや思ひけん番をすゑて殺
るの奥へ引返さるるまを判官殿はねむたく
なれ共師搦取て次日判官殿へ渡さうとて
備正若といふ処まきぬるをけうとうの
やうに彼坊その日をくらす亜蘇の出給ふ中
をくるを見る判官殿御覧じて太郎房を大
庭に引すへさせいふは太郎房起請をもや
くもつてさうらうとて言へしさんはあるま
ことをういてうへそうてくやをやを判官
源をくくと流てうを見の命をおもむ
て私に命をうしなを志のほとを感じ神おや
和尚命ばかりを助をて種金へ遣はさむを
いのうとて立へて玉太郎房ぬなをを置てをを

口ばしきことをもいふ酒井助のうへとも
ゆかりなく没落助のふ四つかの法師なれともも
乃まそねらいんすらん者うめて作を義法しよ
望は来給をもし給来仕殿かまりぬなりのうを
二度ゑ色をまうへきう唯黄昏とをとくく
首級をもられいらくやゆをれいさういめて
てやうて云家河原よひきおいてう斬てん
きるほのぬ人うなりあまこに是主新
三郎といふ雑色うりきやうて下臈なれを
さうくしゑものうていのうて色作

つゆもて酒食敵うる判官る附られなりけう
うを色を四つ九郎の振舞みく我かこうきよ
ゆをなわち伝坊のさくまをみくをのを
読てもせくうを世ようのくとゆれを酒
食敵ちきる嬉き舎弟三河守義経を討ゑに
のほりのふ色きうう言へを頻る辞志中
さまをれとをいのうまけまて式世を言ふ
四方及りすいう沉酒をして清輪中る来う
れなをけまをうさくく沒和沒も又九郎う
振舞志清ふかよと言ひける清詞る怒まて

而不過五京上を思ひ留まるなひきを不
思なきら〜記持久を一日より十数度〜記
を書よりを汚辱八四五て後ちを〜百日
より手数に記清を書てさいをられをれ
ともうかもをてはなるようをきなひきを
況や如源四郎四郎より二百餘騎をさうう
討をよりをうくうきをうをうを略を
結而に方へ落行らやと思られをうをう
より結あ三郎維茂を平氣を九國に中を遣
うをりとのあ勢に判官我より
濃きれよとをうをまへを汚辱ふい筆池況郎
を遣を遣来の敵ていを関紛をつて切てのち
敗まれをうひと中を判官左右なうたふて
をうを六条河原へ引かてを切てけるを維維
義経蒙を四十一月二日九郎大夫判官俊秀
して大義つ奉強勢信を持て養字をうを
けるを事あるうきを中ことをてうへとも指
津國一谷長門国壇浦よりをかをて平氣を攻
亡ぬ一を対志信の四海汚濁を勅賞行を
ぬへを不より種貴に頼朝原ともの後言小

うつて義経うしとは仕りは暫く義西の方へ
つも義経ちやと存はいつもまた後鳥の御下文
を一通ちやうだいやうや生涯の所望たくまし事
ま仕とやうさまされは法皇御覧かうきうん
まる所いつくもひさまとおぼしめし姫と
きのひて法つまま仕合をらる法つやうさまけ
ふを義経郎ふひひなと東国武大将そされ
入て京都の騒動法まういたもしらく義西
乃ひつくへも義ゆきこはいつくうれおうれいふ
まーうひやうさまとられをひつくをとと

ちんせいの出を法皇三郎維盛を始として
同杵戸沢松浦豊ふひいつくふまて皆義経の下
知に従ふ法ふ武ふ方の後鳥羽御下文を給
もつてよつくる三日郎ふいたくのまつら
ひをるさすつさ法皇をも立すてを奥
五百餘騎てうつられけるくま新漢國の
源氏太田太郎頼基ふの内のをとれし
ひつ矢一をさに討ふをを頼金
敵乃のつをさらのをくれんとる所をとり
矢一に討りををらんとそを奥六十餘騎河

西津といふ所にて世をあたらしうし判
官又百騎ばかりの所にて太田太郎兵十餘騎
を中にまとうたりあてあはすがうすがう
てやとりて落くふ義経にて太田太郎新蔵馬
のあと脇付をちらうと及てゐ引返を弥三
とくまつて防矢討
掛さ勢軍神はさつて岡をとりと組て門か
らうとて脇つまをけり接津國太物のうよ
ゐ毎をてらられ者るうれわ西北風と
きうあられい判官の家の毎を信吉代

うらへうら上られてうれうり吉野山のう
給られけり義経法師に変られてなくへ落
奈良法師ゐをめくうきて又うやこへの色を
上ゐ道ゐ奥へうり下られるさるほとる判
官の文ふうをりをきうきらとけり十餘人
代女房達をし信吉のうらは捨ものきらを
ゐまきを弦を松りの苔れもしろるふきゐ
弦ゐ渡のいきうのうへる独りさいて信
君らうをうを信吉の神ゐられ結りきん
て家物とを弦をてくみゐ京へう道ゐ

分判及び山ゐとたのまれたりける弦丸三
郎維茂信太三郎先生義家十郎義人ホの家
ゝる母とまく浦ゝ鳴こゑうち上らせく多
うひよりそのゆくゑをたゝさらす西乃風
急る吹ける事ハまこと亂の惡靈とそきこゑ
月七日の夜ハ入て如源曰所時の白百姓
ゐのひとりて上洛をハ日院帝て伊豫守
源義親并ホ倫家ゐる行亂追討をへきよりの
院宣ぬゝるつゝか世義家ホ注進
やうて院宣をそ下さる二日を

義親の居乃やうゝ行るまゝ留て報賞へ
き由ハ院廳の沙下文ハなされ同ハ日を頼
朝つ乃ゆ始る源て義親うけつゝよりの院
宣を下さる朝ゐ替ゝ夕ゐ変すたゝ世ゐの
不定ゝうゝそ世ゐ日本國惣追捕使源為
朝て源利ゐ兵粮米ゐくゝたゝ多ゐ
世を種食源ゝ乙ゐ家へ中さまゝ上られ
院宣作なりけるそ朝の惡敵ゐ平ゝる者
中國をなりるとゝふ為義義親ゐ
見ゝゝ世報ゐ中始ゐ名なゝて義親ホ

仰を合せられ諸郷中を尋ねるに新名の乃
中さうの不為理なりとて法國寺當護
ちゝ法園寺地頭補をらるゝまゝの
を一毛計をゝ形へさやうそなの事けち
うさゝ汝うやうの事を吉田大納言殿
房つをもつて申さまきまゝの大納言を傳
に事なき人と申を法人事を申家
をひ源氏のように成てのちのなり人も或
を文を作のもゝ或を使者を為てゝ指くに
をつゝもれけまを大納言をさも忘ぬを

す平家の恩のよりて法皇を城南の離宮
に押籠をて始院の御領をのまゝなるをハ
糸中納言を長官つ大納言を二人をそ又
位階中をを補をゝまけるを指右中弁光房卿
日の子なり今年十二の歳父朝臣
う愛をひしをを孤をてなをゝ三年
此卿家紙墨筆をしてゝ夕家の貴首を色紙
弁大宰帥中納言大納言を上の人をを
新源人とも人を新られぬりすされを人
乃善恩を離婚ゝ乃を脱すをて恨なりう

ひくのつて大納言なりさすほとの小条宮
永呼ばれ給ふ種金殿は代々の都の当護して
作られたりし平氏の子孫といへる人男子
ばかりにて一人をもうけ給ひたるむ業
ばかりを不望ありしかは家きき多
是れを京中の上下貴賤を知らず嘉求
むるうるうるて世のうるいくう
もたつのおさまらず下臈は子なれとも女
志ろうみのらきを何の中将敷の
為君光君のの少将殿君達なといふ男女

母なけさうるみられともはれを乳母の
女房の中にはいまを妙給のかうう若ひや
ひふ関むをるおきなさをを水るはれたる
うるみをもて於をなを推敲し刺
給を母はうるおしを父人歌さたをてんひて
をなりたる中にをを小要三位中将怪風
つの男兄代ひるおとをまをまをなわ事気
は婚をなるう色をもかはをなをうはるす
なりひのををして取をむををを分
をををのけるたつ称嘉て改るむをう

くるしみをとらんとてしらぬ家に入ぬる女房の六波羅に出てゆくを見うり西編昭寺の奥大
見るとゆ山ちの小松殿の亀菖蒲谷と申処に
こう小松三位中将惟盛の北方あり
姫夫人おもふてまゐすなれといひたれいか
条う祈ゆき事をもきくぬと思ひつゝこへ
人を遣りてうれ亀を何とせ学ん小戒坊
小女こう達あり多和さなきんゝゆくしう
思ひしる祈まてをまくまくさる難の陽ちを
のそいてみまを白いたのこの意へらを

おかふをとらんとてしらぬ小蔵しきの家君の後
ひてお給ひけるをめはせ乃女房とおぼし
くそあれあさまくに人もこう見まいをさふ
らへとそいろきり入まふ見を一定うまて
まゝまゝすんと思ひて迷ひて出ゆゆ
けまし次の日小条たやうふ若ゝ打園人を
入てゆさまをいるを小松三位中将惟盛の
家君三代法然光よまゝまゝ世家て頭金
汲乃清代殿とゝて如源宮殿時政う清盛
第て仮とうくいろうまゝ第らさせめ人と申

さまにたれい母上義八心ちてほやく始も
ほのかくぬすみ斎藤左衛門兄弟の道をもて
つ迎ひて家ひけまとも成さとを出あをお
かあんていかかさうを出ーまーまへしを
ほ見をもとく上ものさんぬのくへをて
たくひまぬうなへやをてなめきちをひ
のひ巻つ見式とのの女房も清おは物きか
巻もおすますれめ系ちちふ日来を物ぬ
たる方のをいしすを此ひほくうられ多
つまうせとを高乃ううはうとかふもの

しを思ひくなさ蛇むか系をとて系け
よほかうて源ちくさんほくくとうまる
きけうを屋くうて又人をいまてやさまける
ををいるる鶴まつはいるをねをとけなき清事
もそはりんそらんとて呵故の清逸ふ系を
はの初のるの神をはまりとうくおをかいく
さ髪結ひもやさまをまを系是母上はや中
さをぬひまるを弦つるけうるまうは上を
ちやく出さ娶なしふを武士ともの方
入てさうす祖なうを中くうてあなるを

指ともなきみえさせ給ひけんこそいとし涙ひ
ぢつまそはやもえたしもかくしやりての色
星霜はちんいうさうお前の後なひろやさお
なさめ給ふよういやうへしけきはくしもなき
色さことなるねし母上を見のきまに涙く
御物慈をうけつゞせ給へ上のさるかてくすそふ
いさしういをむしと志給ひけるの思ふの数
珠のちいさうけくしきをみかくゐておこ
操て見ますそいふも知ぬんまて念仏申て極
楽へ念仏とてうちらる其君あれせ於て

母上のそなふ路を離れはひぬとそいりのよ
もして父乃ましますかへ入ら条わたきれ
と言へし妹は姫君の生年十になり給ける
の我ら条らんとて侍りけてかくなひけるを
めれとの女房とらまとく見んなる六代治令
年も十二になり給へとしよの人は十四五
よりもおとなしやみかけてち若しうむ指
侍りおりしそれそ敵をよまはけをみえしとて
なさふ母の傍よりもかまるて涙そこな
れなるさて御輿のめくされなり武士とも打

かちんて出る事ゝ毎藤六も浮世の
たゝなる附てそ来りけるゆ条書とも
ろいて馬より出といへをしらん大笑ひ
ふはゝまそうちをしてそ来ゝ来ゝ
うへ乳母の女房夫ゝ乳地ゝ外てゆ
へこう迄ぬひそうゆ母上めのとのゆ
言ひなるをゝの日来宮乳子ゝもとゝ
めて水ゝいれ出ゝ揺ゝ或ゝ推敲し刺
組し揺ゝうて先ふゝきこゆなれを
我子をなふゝてゝ出ゝんすゝむ迄を

をゝ知となりたれを迄て新をゝうきゝ
ひをゝめ人ゝ子を乳母なゝ外ゝ遣して
呼こみる事もゝうゝうきゝ人思出の色を廻
しゝ習ゝうゝいゝ出ゝんや色を生義してゝ
仏来一日行呼も方をゝ知たを人のゆゝ
ものをゝゝうゝ出ゝ習ひ夕方人乃中
ゝてゝたて出を知をたのをゝきし人ゝ
ゆゝて別迄て我ゝ人ゝ出ゝゝ色ゝ正て
ゝ新ゝのいゝをゝや一人をゝまゝゝ
一人をなゝを日ゝを行をいゝきんゝの三

色の君歟畫肝心をなして思ひ設くるふぜ
なきをけちをの時なくふとをおもひもよら
ぬ日ごろを長谷の觀音詣さらぬとをとうぬ
のう憑こをまうまを捕られぬる事れるる
けちを只今もや失はけらを事をうさをとを神
を敷小押ひてくけめくくとうなうれるる
ようふなれとも物をきめくふらくらして
寢もまをろみ給りすめおをの女房の喜び
けるを只とちと海とろろみをけるを為ふの
子の白い馬よりつてを来りけるうあをつをふ
清を一うを心はいをを作ほくかをうの能
をて為をいををてををををけるを為て何をや筆
ようて根のけけをてのうけるのいを程なく
てうをなをろのををを紙をくををも人を
なを為たるをを志をもをををてやうををを
めるをとろうををさをを筆清く長を為も
いくをのうをを海をを家もうくうをなを根
のれを雜人曙をとうを人を為をを為を斉藤
六海条をを毎上をくいのうやと問清人を
をををを初め清ををを為をを清文を

ひとて取おいくきうを見てゐのふよと
まてそ約いる細もはいすさこそ清ひをを
なう物りめさきはら乗いつの雑をく
清定こうう思ひまのをうへとおとなな
やうは書のつの母上見をとる懐ふへ寒角れ
まをを立すれりついてそりまふく
て時別遠は推うけ至者を弁藤六明の雑
こ物ア清のかういは清ひをまくうの系わは
りんとやれは注く清ひ事書てなりて生ると
殺藤六いとさやてかるまうと乳母の女房な

てのひ人のうれをさたや大見ちをしまき
を出そうれ色を見るまり留てなさたりを
ほとふ戒人乃中者るを見ちりおく高雄と
ふ山ちの至父見坊とゆ人こう種金沒れ
ゆくしふ大事の人は思つを思ひをてまり
まりをうう上藤の子を男子りをんとて
物りうく折くなれといひたれい乳母の女房
うを思しをもまくぬと思ひうさを雄
る弱入文見坊よりひをまり血の中をを物
忠たてまいうきく今度を十二なりのひ

ぶる弟子のもとゝまてさふらふ
なれは金をを清て浮世子にせきを行ひなん
やをて生人ゐるなたふまき外祥もおりますれ
ゆゑ内きふ城丹きん市なきをうゐくらと
なるひつをを恋る思ひてことのる細を
同浮ふ屋くをて犯上る懐をさんて中
けるを小松之佐中将維盛つよ浮ををーう
まゝます人の弟を智ひ者をて行くひ
浮るをも中将殿の恋をと人やをて行ふ
らん昨日武士なとられふふなりをそ

浦けるひつをを武士をを誰といふやらん
小条四郎時政とこそ名乗申侍らひ浦ひ
ぬ者はやを乃ゆをうを生のいひたるをなの
むへゆまをやくねとも者ふ武士ふやら
まををを仏来ゆまをよ思ふ計もなりけり
ふふ生のくいを色をしかんも者ゆへて急き
大覚をつくゆゆるる母上ふくををを者
を拔ふかけるやら弟四まもりのなる湖行
へも方をふけをやなををひられををて事

の子細をとひまゐらせしに女房ひしと氏
中さまはかやうをきゝくと御中たるをけ
まてしさうをひ〻ものはかせをはてゝ一
度我かゝをゝ〻〻とそう御〻さにもたゝ
はかをぬ相をなみそやを後ひしをこはゝ
るおて事の子細をゆふかゝ余中さまけゝ
事家の子孫といふん人男子まをひて一人
をもうちと最中〻おいゝをて失ひをゝつゝか
ら〻頭金沒ゝを作をゝ為て作ほゝかゝらの
ひををしまを相おくゝうをて皆失ひおいゝを

ていはゆうを小松三位中将維盛卿の孫六
代ゆかの坊中御門新大納成親ゝの娘の腹
よりうと雪雪氏姫ゝなるうをゝかも
て為つゝゝいゝ条らをてうなひまい〻
をんとそを自紙ゝかをてゝ求けをゝもゝ為ゝ〻巻
て流るゝ〻ゝうゝ下らうんと付ゝ西不心はゝ
ゝ外一所ゝ雪いゝまいゝをてきみゝ氏を
ひの色ゝをゝを入へを餘をゝ為ゝうまゝゝく
位程ゝゝゝ悪も角も志をゝてをゝ為ていは
ゝゝゝまをゝれを生いゝくゝゝゝ見ゝをゝん

とて家民はりつゝをぬく所をみる人きを
二重織物の重重なる足本の数珠なるぬきの入
ておなしくさを埃の
袖よりくる数しをの世をの人ともなく泣を
を今取うちときてまとろこ泣ともぬるやれた
ほゝとすすりおもをのふをみすいゝ
するよ泣きてもくゝ心を新うらうさく
を思ふれけるのきを生をみをひていく
おほゝうん海ゝを紡ひしひしもまろ
る墨深の神をそのゝきけるまのをもを

いのなる恋歌となりぬとをいふとを見をを
爭の失ひをるゝ人をのとおをつまをれをかを
よ向て立ひけるをを器をのゝをやいらんは
弟君をみすいゝをうへをのまるを糸行う
思ひすいゝをいなふのゝるうへ三ヶ日
此金沢をてたゝ紐金へ下をゆるいくを
らんを放を立りすゝ没を世すゝを
まら乗をて院立何いる京への浮るの業因
もゝゝ如富士河よしよるまるをりゝ泣て院
る押流さまんとをゝるを又を帝山をて

ひけるに紙のあひのうへに金剛生佛福原の
經の清所に来て侍意中かいて事一時人清
幼来まを渡ひいのなる大事をもやを生の
中さんする事をを新勾う一紙う用をけ
てんとうう意ひしうを不意このをこをを
旦見ひひ事うう事あをかうらうぬて
中つをふる他を繋りを自むして金紙かろん
を種金敷る意紙神付清ゝすをよを忘たて
つとて屋うくをの嬰うたく意学う斉藤
又斉藤六至を生方れ佛乃如うに思ひてを

紙合て海紙流を見ふ又大光寺る来てうの
世中れ毎上りう計のうれう思れ事
をさまとも種金のちうらひなれをいうく
うをすうんと思つれ事ともれ女日れ金
れ色のふうう毎上乳母の女房ゆひをとを生
色て偏る長谷の観音の清助をなを意をうや
と憑ーうそをこうれたるひくしてあうー書
さをのふ程る女日れ色分を義なれや生も
いうるうくをりす見をされを何とうたる事
をうやと中ーさんうるーまてを文みも

色六つまきのひきつと小糸を生乃廿日とやさ
まつる物来れ日数をつもりしを種食後清宮
さまなきかをうつかれまさかを生京して遠
をくらへきに抱をとをを下ら糸とをひ
ゆ糸巻つと毎藤五郎をみきら所ん
をかして思へとも生ををみをぬ米使者
をたるものほをねし思ふりをかるをけ
子見ホ又大笑るかを糸をひ里もつるみを
ひりすれ糸も嘱下向はりをて嘱をはう
はとかりたれい毎上南呵ひしをれさ

も軟もけるよりて下ゆる故を毎上笑はを
れ女こう少心も取を逆て偏る親当れ清助ル
こうと軟しう思つまつるに沈る嘱をを成
ものもいの計乃事とうををれきんのれと
乃女房も泣きつと又乃中まりとを安
辨を泥つくなさ逃ひりを来をなーやつ
なんする老の生まるかりん処まて六代を
名をきよ思へへうを清て上らんまを身
をくれこうををるくんうさ紙をつくをんら
てやかて笑ひをかんりかるを同行へをは

時の祖とうはさまをまきく作人を故を
は祖時没井仕りひ作る小系の家子家ふを
をよて名諸行けまて或を金佛中者も作
或をなみをを海を着もひを中母上さてし
子う宮掛をなかとあるうをの法人を人の
只系をきは時を作ぬ所まをおいて浄
教理をくをまく作くは又人のみ系を
はをの時を後よりのをを行く法神浄教
まを面て後まひををひはをを母
上さうあらあ面ら雖なけきを心さ面

浄まをなをなをて暫しもあをを海系らん
ををいひつれをもをるをふあ日まあるる
まあまへもゆうを見をを見ををひき
乃日は法を代時丞意みるてしをもなほく
す今教坂の命と思をふてさうを心細をを
けあはをく海寿をい明のををらふやらんと
意へを見をいはくまをを浄代仕りいふも
なををまをまをさを浄骨を取まり高野乃浄
山小紙まりお乱へを仕を浄業掛消坊ひ乃
いををんとをを存乃ををををまを

流てそかしまけるくて時刻遷に推移て
それも母上時のほども覚束なしゆかしきに
うつ色まと言人を二人のものとも艤中て
所おきはとに同十二月十七日のあつ川氏
如源宮康朝頭君くし奉りて都を立
小笠原藤又郎嶽左も清興氏左右に付て
そ参りけるに小乗蓋ともおろしてあるに参
といふ色ともの乃家後氏清続てらへ参ち
参もいちとそ血氏外みるを流てうちも
かしてそ下りけり公君さしも鍾しさう

おぼしける母上乳母の女房にも別れてる
住なれし都をも雲井のよそに成てかふを
の前後の東路に赴いて登りとかられかん
ひの中推量られて哀や詞をもやむる我が
かれを我計きりむつと附紙まし物いひの
かす者のまてしきそ今やきんむとある宮河
原と思ふとも冥山をも打過て大津の浦に
も成にまり墨染の原のいや何へてしるふもゑ
霊まかり国く花とうら色く毎日稽に發
行國するなかしかしに君の露の清奈らく日

行限とそみえて十六松原といふ所下清澄
のさすらへさせ給ふ所に下居て布皮をしき
あたりなる人々とてをへまるかの条急き
馬ども乗ておりぬ夫れ清澄寺に近う参て
中さまけるに先まづ事別の子細て
をいつすまを急ぎて至るや彼ひしやを
まてを待ぬてけるなり山のあなたを通
金剛の清心中も禄所をうへを江国か
て失ひすつををるる由指宿はるをいらん一葉
不感に清方なれを誰やともけをを清ひ仮

つとや中さまけまを弟君とのうの也事
ゑを及給りす斉藤又兵衛尉をうく高ひ
参るをのれ叩こ仏ホ部へ帰を我さりて
をくれられなと中へつらひを始を弟
をまを申を参をまをうをめりを海をさく
給ひく欲きうをこ約をくをの陰をて
んをるをうの知をて後をの陰をなをんを
ゑを通金まを参付て上をるをやをと
参へを二人の者とも海をはをくと海を
屋ををて斉藤又兵衛ををををへてをるを夫

小をくまいをなんいら一日行所命生て
郡へ引ものとなりしかへしもあはつすとて又
源を押てく外小巻をあたへとそうとすと
志阿清くしに肩をうくるたりける所ちい
ちう叢しき清をもつて家へうさはさせ
ものを当様に武士ともみ来てあふ糸
打つまる清九内まうやとて皆鎧し
袖をそぬらしけるをはるのきを面小四て
をを合を高ふ小十念とうへ人のひはく頭
拭をてそまるきけり猶皆之後三郎後切を

るをうまれたちをそのの左に方をあ
者に清盛ま立まるを沢る斬をひとしき
ちの目もくまををきくを果ていはくまたち
をおけてしとも花をくす後不覚になり
たれい仕ともあはいをを他人ま作法をられは
つてて太刀を捨てそれをきふかるはくを面
きをれをきをまとて切るををらふ形まるく
ま義朝文清をて月毛なる馬ま乗る後
一人殺をおてそ他なるをけるのれいと打
あれ松原の中をそうはて義しをあ者を小糸

教化新をらるるやうにて者どもひしめくと
ころに義経これいまは僧になりて
てうあの天業を祈るべきのなきこころ
望をぬいて義上にてそれを招きけるに柔子細を
とて結服はいまは僧はとなく絶来りいるる系馬
ようにて下男を召連れ種金没は教
書を見るとて義出を小系見て罪りくみ
ふり城や小松三位中将維盛つの子息六代
ばかりおかきてい結る城の至文を坊
暗を請うを依頼をなさを新きらるるに小
柔四郎没へ新知とのうまいて浮世のうち小
源推せ〳〵二三ばかりにて神妙なりとて
さをの遣れて奇策立要義六をいふよ
及りす如系此義子承おを見ぶ牧ひの源
とておのしけるを注ぶ文を房をか来り男
忠を結をわらるとして乳父城小ゆくしけや
世男忠の父三位中将を初度此軍の大将軍
すてれたるけを誰中ともいうをけふ
まして平世義の関至のんを破りてをいうて
う異かもおををへさなを結く恵に中遣

とも程を叶ふまじく云ひて那須野の
つるを出さふ用剤又笑も猟場へ行して
撫くるやうにてあひうけ[illegible]
けら[illegible]なと言へを小柔中さまけるを入せ
日と作られ幼果れ日数も過ぬとて種金
汲湯窪さまをなさうやうもしぬてくをして下
は猟小町ちうそ已金ふくるてやまう
仕らんとて鞍置てひのきうまたりける
家替ともか府藤又府藤ふをみをて上きう
ふるうあも遠小打をくるを今暫くも清水中

つくへ共を見を種金ふ拾て拾露仕るつをふ
大事を能多作へも鑑中てをてうれらわた
ひよ打初てそ下られまるまことふ情姫
うくるをうさふ程ふ又見坊為を清取をて
取をはふ仕りくのほうかとよ尾張国熱田
代魚をてと度もすてと書ふ学ふくふ正
月又日取る入て郡へ向るのほう二条拾遺
なる而下又見坊乃為而ふれをうまふ
義仕ぬてたしらく休めをて奥半りる大見
おつへ入まう門をたくけとも人なきまて

言もをすあ夫人領のうひうる白いろのこと
葉地のうへきうるをおて尾張かつて
ひうひけうに母上をのけうに
出向きうるうういをかけ有まる秋谷と業内
を知らう絵地をうしに口をかきて入まるち
のう人内をむうる和とをうしを見をさま
ら何とかなわをひめるる事をうや人用もう
をりのうをして金をはのうとかりひ―も意
しきんくをと一度みをやと思ふたのなの
とて絶対なけうるうみ浮ふうのう謀不理

とおかうして者なるようを待ありて定置れ者
ともか同物人を変れ内を大佛殿ときうし
給ひうの正月のほとりを長谷寺とのやう給
らををとそ取りうへちのう浄者承へ人
のかようとを見て作りすとやけまを府藤
立ひうう系長谷へ下る母上ま見ありひをてしま
ようや出れを取相もとうをあへをいうをを上
ら物給ひて弱者を見ををまるを浄者
てを出ふをまを相を源なり母上お氣をを
まへとあるをうをうをやう文覚行みをて出氣

もせさ殺をうを高雄へ出の色変て母上の
ひすのなる法師花をつまて扶持をけるの
とうさこそ親高大恵大慈を蒙るをも
報なさをも助のふ事なれをむしもの
ふ多の〳〵恩といへをうの叡さうをし
事ともなり云代ほをやうく十四五
をなる法人をみの叡さち数〳〵あるを
もてをう〳〵やくうをなりをく上をみな
ひくをの世をてう〳〵まうをう高時をを清
目をてう〳〵をするものをと高ひなるをう

わさをを代あをなれ種金後役宣をを高雄代
をのををへさをを親をを小松之位中将
維盛つの子息六代法をあをりやうまいや
らん高野をおを法ひ〳〵格よ勧の恵歌を
もたい〳〵け父代祝をも雪をつをかほをの仁
やらんとをさをれいを父房代遠事をあを
を一向をこもなを不を仁ををひを法心安
むをしのをきを人へとをさをれとも種金
敵をもむゆうをけをて孫数をををさを
やをてを人を一天下をの法坊をあをを

軒の一枝の月をたまはりの時ゆく末を子孫
乃末をたゝすと喜ひ給ふそなりけり
母上の世を去給ひていつのやゝ六代清盛
らやゝ〳〵お家を大内とありしを生涯十
二とせし又治承の末の春比清盛も薨し給
清盛ハまことはなみ落し掃れ
交衾をひなと用をしてやうて清盛ハ
おられ給ふ新宮又義朝も同やうみ出
立て清盛ハ家の先き聖へのかゝる父
の者知徹をうつて清盛ハ入道なつ称ひ

清盛家の横清盛乃めうさ海をそしう暑
とひ旦を記録しをて経聖へこう落ま
れ漢文とを中ををうをの清盛父の澄
盛ひとうて山をれ嶋見渡りくまうま
ひ〳〵をを旦をれけをとも波風むふて叶
ををを力及ぬをを孫廻りをふに月の父を
いけくまう流を清ひをんと奥をよまう
白波をを色をふをうそ心つまける清盛
おをこを父の清盛やらんとなつうしをて
嫁を孫を去を迷ひ〳〵堪をむあまの衣なう

はせのうちに多くそこなくてはくられ業ゝ渚より一
筋遠山し終夜經彌陀佛唱ぬ遠ゝ
さ僧を請ゝてゝ法の志願る佛れ叫くちて
書ゝつゝ紙墨れ功德さ叫ゝ全靈る廻向
して彼へ向上られ業ゝを法乃主上を後鳥
羽院まてまゝしくゝ浮遊紙ゝ叫ゝと
せをれりゝ故為を一向彌陀のまゝか
ゝられい人れ無彩もやゝ是を勉者ゝ
みゝうゝゝゝは麻紙嘉ゝる業乃を業を細
勝を変をゝゝ文中る飢て死するれ

つく孫殺を記さまほけりの忍は滅亡してえ
光房の富士二条猪熊なりの所ふ人ともの
まうけ者遣ていけるる餘千のうとまきて遣
る隠岐國つる海さまきるえ光京を出るとと
て光房とふ光房の後のそしてそふあるを
をたくぬ者をたとひ勅動なきりかて部れ
所為のををのをして遠くとをきれ國まて
なりさまをるる鞠杖羅老ようやをのうねは
う捕るを我なのさるる國へしのをとら京
をる物をとをとるあの里くうやるは

をを餘るさまうちやうの玉祖をせさ殺ふ
るえ光のやうるをを思はやけるやされを兼
久る法孫殺記さをせをひて國をあかれ
遠くと隠岐へくにまそうけさまをまう
まうけ富士の祖ようを思議なれを國ふ
ををん叶くうの之灵をれてなるうるきを
松ほうををうつをやはおへも京の法相殺
ともやけるとうさきくるをほとる云
代法をを之法師とをる姫の奥ふおあ的
ひをまうてをるけりを猫食殺さる人の

子なりさる者の男子なりたとひ取をきて
[illegible]
友貞兼小作をのづから実家へつゝ
ましける駿河国住人[illegible]
をて領金の田部河のもとすてはなかき
まつ[illegible]十二のとし世をすてゆきる
まて[illegible]
浄利生とて宮こ三位禅師をこれてこう
[illegible]
[illegible]

[illegible]物語灌頂巻
建礼門院を東山の禁苔田の邊なる所に
[illegible]
奈良法師の坊なりをうしてとも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

させ給ひしのちとやうの人まで皆
動てく法橋をなりて法ひきん
法しの中推量られて名なわ色代陰小上
ばかりのことを見る以巣所雖ふうことさ
ふまくまそうのまて波のう色母の中れ
法橋をしそあひたうそおほしめさまを
教蓮院法意寺相西海子墨雲白屋若深義
法橋左山一意月うまもいふりなし
かうそ女院文治元年五月一日法橋ならる
さ勢ひ者り法戒の師まを長樂寺乃師祖

房上人京都とうさまさま法布施まを之帝
の法垂安なり今を乃時まてもめさまらし
れい法うつるもいつるう奴を法新見る法
筆をんとて西國ようまるくと部まて相
を約ひつるまるそいのなん世ひても法
力をを相うし出ようの御りめさまけめを
法勇せまなりわへさ相のなさうへ上を相
法業相代たのまとて法とおかう奴相し
ふ上を上人を乃ふく何と業をつふ自もか
うて墨深乃独を新る押蓮てなくく法

而して法おられ給へる仲丸法皇を幽閉し給
て君樂吉の佛事まうもられるとて宮
志女院を十八にて女御丸皇后新嘉門十六
にて后妃位まうれつる夫皇丸後鳥羽
をのて知まを朝政をすくめまうを義を当
うまのうの妖二にて皇子誕生にて皇太子
まを位まつを始うまうを後秀のうかを法
て建礼門院とまうけまうを入きあ國の法皇か
ふ上にてトの國母にてまうまあきををの自う
志をふあめて斜なまうを今度をか九まうなま

きまうくなる桃李の法ようをほひ程こまりや
うか姫ようけ法王をいゆる義へさをぬまを
ともひをいけ法うんさ法をてもなかく
うもをきをふつをかなのれをはぬふ法指を替
さ娶給くなりうを女院ひ志の為ふい
らを法へとも法敬を交まを法をます人をを
をううとて海へ流みうう法皇帝二位
教入法打新ひと法為まうひていりか
らんまて志彩へしをもむをし先さを為霧
の法命のおまうまをきまをのうく叶ま法

目はみるらんとて涙をさへながしたる
用は紙数なれとも面白
きのうへ打まもりたる者の事
なれとも爰ハ法華経を
焼の新説ハ法華経まもりうけ給れ
ひとりとけるを上陽人の上陽人をとられ
たりなんとうらみもうらもとそ
うきをうつ思ふ書となれとやりとれ
ひの新の絵うを色重うをきん色摺れ図なり
うを蓋をけるを山時島の二羽三羽者

信て西をなれの女院故の事なを里に出て
浮世のなさかうをうをさまをける
ほとときすを花たちの書ぬめて
なくををうれ人やあひしき
女房をまを二位法朝の三位の上のやうを
さのこたをう水の底の法をねて寄を
れのうをなきみ捕つまて鶯墨をうを老女
ろををさも筑を指ぬの色成を新をやはり
てををうをもうを如若乃うをこ岩のはをこ面をて
をのうをうをさををを紙位あり者をみる

姫と成てのぼりつゝむすめ迎ひ
のことなてたけき賢人もなわほゝみふれ
人の同来るもなく世間あらう咎けて七を乃
孫まわひうんもつゝやめ笑うて義なわ玄
ぬる七月九日の大地震る樂地も荒廃さる
清水も絶あ玄破まてゝいとゝそまき清ふつゝ
法使をなゝ孫安乃簾役文門を当るたまを
なゝん乃まゝまわれる難を忘けさ賢道
ゝるもなきなをしるうかるいゝの出れ
拝ゝ恨むるも義なわさるまゝまを無も潮

長をなれをいとゝふ清寝えうるてあり
義さ世のひ巻り出まぬ清物思ひは秋の伺
ゝれさへ行添ていとゝ思ひ叩くうそ知か
たちさまけゝ何事も皆替ゝ果めるうゝ世
なれをかつゝ情を知まふつゝか苔の苔
乃ゆうつもゝれ結ゝて誰ゝゝみまう
てゝとゝなほゝそさまとも咲第大池を陸
房つの加方七条洛理大文信陸つ乃加あよ
ゝ三ゝひゝゝ換ゝる坊ひゝさまゝ女使
をむゝあれ人を乃育みて主をゝとを

霧も里食よりはつまり酒をとして清酒を流さ
をなひたれい附すいをしるる女をうを産も留油
をそめるさき産りるの清柄屋も部なをを
うてを絆乃為行人れて人目も濡れたをゆ
乃清金の風紙まるむ祖を浮事きりぬ涂
さ山の奥れ奥へも入なをやをおほりめ
ちきれともさるへを伝役もまりまさす
武女をうの吉田る来をけるを大原山乃お
里寂光院をを不をう罪る行へをうを中
なる女伝山里を畑のさひしきるをて有か

きをとをのうををるを位ようんなる酒を
とて心食たくを行ひをり清興なをを酒
房郷の小をるを清さるりをるとのやを
治元度長月の末る好麻麦伝へいをおりて
を為すら口あれ持乃交くなるを伝筑志
色を愛ゆる祖る山陰なれをや日も読る
言うくるを暫をの鐘れ入遠乃言をあくを
ふを聚の寄しきみいとく清神ぬ遠海さり
蔵をけしを未薬をらうの立うさくもを
りしりお河面清くを為れね幽る言信て出

れうみも強くなりとたのうに取殺しる
法心細さたとへ為るべきかはなく浦川
なひ鳴はうひをしりぬ角をなりり
志ものをとはりめすうつるすけ寂か
苦むしてさひさ敷不なれをまくかりを
うはりめす寂むさ意人萩原新蔵て
難の筆れうまくるうろふ色は法語
しても法方の上とやれほくん佛の思お
色ついせのてを子を妻成ふ兒秋徒業拙
と初やさを法ひ巻をいつの色をを忘れく

きくと富れ法師と新ひと法方るうひて
いのおらんの仁忘彩へしもれをしめを
をさて麻之院れ倫ふ方文なり法書をむ
すひ一周をを法寝不る之一周を佛而不
しらひ畫和朝夕れ法勤め出時不ひの法
会佛おとくるをなくして月日は逝ら彩
のひをを叮くて神垂月甲れ五日のくを市
に遊る聚布なりのをを拍ををなりをさ
ふをれをを女院を紙いとふ而る何者乃同
来るそのを見らや思ふへをうのなりを

うきたのりんとそうしるをらるるかかるべかりしかとうふまそうあるまそうにて世俗さそいのうやと作せれを大池を仕廣なみるこそくさうへて

いとし孫姫みたまきのそせんなくの蓋れ

そうくをたつの入るかなるそう

女院義よ於たまりてはあをまとの小陳子

よりうとやくえさ勢れたまれ叶う清

清くくの中よ里舎かうくふる事をそ仕

殿さ中まを餘毎あり新るおらへかうへ

未そそ七月宣樹と叶くとまり岩るよ清る

出をそ八切徳水と里台亜常の表の乗風よ

清てちりやそそを隠の秋の月雲よ作川て

隠易を昭陽敷るを敷ひ物るを風未て

白紙ちら長秋文よる月紙孫せ夕よを雲

却て清て光を隠をしのしを玉機金殿小鏡

のしをれをきみなる清楊居なりうを

もとを葉引法ふをの番ようの秋を去をき

巻りうくて祖小法皇を文治二度の芸れ

法建礼門院の大原の栖の清を下の清流

をまかりうと智めさまれを二月三

月のほとをぬけしを餘をもつまるほうをを
を嶺の白雪さらやらて谷のほらくもうう
とうをす春色家にてかすもうとうし法皇
教をうけて大原の奥へ法華なるたのひれ
法華なりけれともの人くまを捨大
花山院法門こゝろ六人没上人い人ホ
面かゝ仏ゝ鞍馬寺の法華なれをの
法原の涼貴父う補陀落寺小聖皇太后文
舊記殿法人をそうれうり法興うのさま
ゝ寺嶺山かのくる白雲をちりうう無れ

見なれ寺聚ゆみゆる樹をを春の石ゆうに
しゝ新く法を知月ゆ白餘の事なれを裏を
人怒本の中法ゆくをゆふゆる法華
なれを法法人志なれるもなく人法法
る法を忘食やられて春なれ西の山れ禁
は一宇れ法華ゆり則家実院ゆまや弟ろう
法くまゆる泉水本立ゆうゆ樹の形や
いゝう破まををゆ不ゆれ書を多き病法
てを月老位れ焼法ゆくをを加樹れ形ゆや
中へゆ遊人弟を成ゆひ書御色をゆらゆ法

池の浮草波に漾ひ漾ひて墨すらと張られ
中流に松に望れる岩根のうら波のうちをか
きわけて蓮まつ入る蓮掘初花ちるも跡しま
岸の山吹咲乱れ入る雲の絵巻の時
るれ一ふしもの清きを待歌なわ法皇こ
れを勅撰ん玉そうそうとさまけり
いまみつ下けれさくらちりたるさて
おこのうちにうちのうるなられ
かう丹書く岩の入たを海ちる蓮ちる水れ高
さへゆへひらめる処なり緑蓋の垣せい

あいれ山繪よりくもの華も及がうし女院
れ清書をと清らかすれを新まを知う
かちひのうを志れふまりをの忘草新菓屢
ひうを新湖の巻よ志たを書いてう涙を
須せうを面不冨のとほうを清ていて松の
あ気めも面ちうをて志れを書も蓮なも
を子日新よりうひてたまりてしを見く
さう書をうろを山を為を蓮いさく小藻
る風さをきたたくぬ方の習とて浮ち
志けさ行程部の為れ言信を見を子ゆ見る

あを垣や繞る平岡畑とそを崇る本住吉
積代拝殿の素木の新代者ふ代者なり
てそ正木の舊者ほらくる人まれなり而
なわ法皇人やあるくとめくき者ともも
清いらへ中者もなし屋くそて老義へくる
尼一人系ふを女院やいりをへ清華なるを
ふるを作れいは上代山へ取ぬみかいくを
みそ作らふとすさくそ代ひとふ清ふ
らひとひあくを左様ふくそ仕へをくつをか
人もなくそや清いくうくうくを見作れい

世尼中けるを立戒十善の清果報をさをのふ
る作て今ひくを清因を清筵をくを作ふる
くそ拝方の行るなくのくを清方を行まを
作らふくを因果理くを歌知を因見を現
在果報知未来果見を現在因を知をくを
未来の因果説義て作ら分なひなを作や
川や清報ある者のくを者を者をを十九
くそ伽藍をお擅特山の禁くて木の聚説
くを称て廣をかくを山を上作て勢をくを
者をくそ水を法ひ難行苦行の初はくを

て殺ふ成ふ正光志紗ひきとうゆうるば尼
のゆう接紙浮語人すれと方みを縫布れ分
もはくしぬうのをしきをひうつめてそきうと
けうあれを接ゆてもうやうれ事中不思議
さうと思食て抑海をりのなる光うゆを作を
きてしき尼けめくと注てもしをを浮也事
ゆを及ひす良ゆて海を押つくゆ中ふ浮きて
將れほく作てもも如ふ紙を入き信西の娘
伊波西行と申者ゆて作くふや母を紀伊二
位さうも浮いて打みゆのううさふう

ひうよ浮筆志忘さうせゆふよ付て方の義へ
ぬる接思ひたうけたくしを文をんけうこなうこ
う作ゆて油紙敷る推面て思ひあへは接
目を尚られを注皇さけを海を伊波西行よ
ううれきを今さう浮語人志ますけうと
義とけをうおほうめ塚とて浮海をきあ
色さ勢作ふす紙をのくくも不忘孫乃尼ふ
と思ひられを理て中きりとを合感しあ
られけうは申山方を新語人めきを千種乃
霧立見難ゆたふきりくるを浮く外面の小西

を出されたる法華経の
ひらきをなして僧をしてうきをく法らんをはて
一周忌を来迎れ三箇おります中箇れ法華
をまを文乃条を望られられたるを書賞の
色ぬりたふ善導和尚并に光嚴れ法新を掛
られたるハ抽のおろ九枯の法書をとりまき
たりらんしやの白ひる引替て書れ姫そを
八ほろ好沖乙君士のあ文の意れ中をを三
箇二寸の床をなら〳〵へ十あれ法佛弘持し
法ひろんもかくややもう覚ぬ僧子をを法

種乃あるとを文紙よういて不くるをさき
らををの中ゑ大江点墓法師の法源山を
して孫をるををん釜鎖登要弧雲上至京来
迎義日おともの〳〵まをらををひきを乃き
て女房れ行鬱と却るをを
おもひきや涙山れおくりすをぬして
雲井れ月をうそをりみんとを
さて後を法覚すれを法寝不と見しをて竹
れ法さかを麻れ法安紙乃法衾なと然られ
なをさらも不勧道去のたへなるをひ激

をはりて後雅楽頭乃ようほひもさめて後
とて成よけるに彼女はいと人くもまのあたりに
あらでうせ事をなれしとは掛るおぼくて皆
神とそめるさまなりける玄猪の上乃山より濃
墨漆の衣着たる尼二人岩乃ゆ路を伝ひ
ほく下数らしをのひとり法皇殿御ん前
われを何者なるぞと作れ尼海とうさうして
申けるは吹のみ財よりのをしけるは副
て掛をのひしるを女院のそはをたすひ
給ふなわ書本なるひわくて伝ふ

を馬頭中納言雅賢姫立乗大納言国綱つ嘉
子と帝の授乳母大納言伝房と申もあへす
法皇わ法皇も表けるは里食て授乳をあ色
さ勢給ふ女院も在ていとふ授乳といひ
給ふ今時ふ授乳を授をとはいをむすん
弧ってさそふ法もあるやとおぼしめせ
ひそなさるひくことあるの乃水法姫
祝も志ゆ給ふ嬰記の神れうへ山路れ霧
も志けをして志ゆるや義さを給ひそうん山
へも沖ら勢給ふす法書玉へもいをおつ

きさすがにさきたちくさる雨に
はるかにみをなげうちをもて
をいもふかなしひけうの考しうはらふへき
なやくに法華面をうて還浄なる事をは
しめてやれい女房宮ふかいをおり
ますに一念のまことをもて持取乃是四を弘
志十念に業のとほるまこと宝の来迎にて
を待たるる思ひのかなる浄業なりける不思
議さうとて浄見系のうをまこと注宜は浄土を指
ばみまいりうを要めるふる他恵をい弟物程遥

丑滅之要欲罪六を未免又義之他善見城之
勝妙楽中間禅之苦聚園又養竟果指幻国楽
況る浦軽をうなる車輪代免くれるのあり
志夫人乃ふすいに他みを人ふるを作けう
物の的さるうてもいに方をもう事とひ系
らをいなふ事ふ付てもはうをいう〳〵指
めり出らめと作をれをは何あるも苦
はれるあをを結うをを信像像房乃小あ
うを迫こや道る事をは信像像房乃小あ
あに人ともの育みうてあるてしとを寄日

[illegible]
海さ殺生人もはなはだいとせる女房達も皆
神ともそなはるさまなる所ゝにて女院なみな
ゝ[illegible]をさゝくゝ中さ殺めたる所なる
成さふらふ事ハ一とせの新中ゝ及さ姫ゝも
ねやも後生菩提ハ[illegible]ひとゝ[illegible]
姫ゝ[illegible]や急ぎ稱迦の道ゝ[illegible]なり[illegible]
弥陀の[illegible]ゝ[illegible]五逆三逆[illegible]
をけれ三時に[illegible]招を清めて一すちに九品
乃浄刹を願ひ[illegible]一門乃菩提を[illegible]

生涯の未迎を祈すりつのをすを忘れ
ゝ[illegible]の清ぎり新わすれひとすれとも忘
られを思りんとをれとも忘
思ゝの色ほとるゝ[illegible]ゝとなり
さ[illegible]ゝの清かたいのるゝ[illegible]
ゝる事ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝらふとゝ[illegible]
文[illegible]ゝ[illegible]
も十善の餘業ふ[illegible]
一ゝてんよけりすとゝ[illegible]

佛法流布ゝ代ゝ生出て佛法流行の志われ
を後生善所願ひあるまゝ出家なれと人間
の有ること難習と文殊菩薩つゝかまるをいとひ
清貧掬み素らを仕まるあなうらうへと
て清源寺さあへ出家の法師つゝ女性のさ
ゆさをひけるを分雪お國ゝ娘として
を子ゝ國母となりうゝ一を四海を皆嘗
乃まくなわさあ孔乃素ゝ姿ゝ乃文
つ色佛名の色乃書物孫子下の大師乙つゝ
もてなさ祈りうさ面を仏教口祥乃雲ゝ

乃つ色ゝそ八百ゝ法ゝ松ゝ乙ゝ八ゝ
さふふらんやうまを百度色ゝふゝ者
やゆひ清源寺霞ゝ色乃籠の間ゝもて
おさま素を面敷の掛ゝ掛ゝ日を
ら九夏三伏のゝ三ゝ日を泉をひを
んと魅ゝ秋を素上の月を乙ゝ色ゝ
ゆるさまを空色素雪ゝ色ゝ夜を書紙ゝ
祈てあたゝうゝ長生ゝ不老の術を祈ひ蓮華
不死ゝ業を弱てを巳ゝ久しらんを思へ
ゝ色ゝ書てを乃ゝ乃へ行ゝ

[illegible]と上の果報を見[illegible]とうて[illegible]
[illegible]のさても秀衡仲
[illegible]のやう悪[illegible]一日[illegible]人[illegible]住おれり郡を
[illegible]井のやうなる[illegible]て故つ[illegible]の庭と打
なのめ[illegible]をのみ少し須度よ
[illegible]浦[illegible]ひさすう[illegible]
畫やまんく[illegible]路を[illegible]て油をぬら
[illegible]千[illegible]もなきめうを浦く
過[illegible]ある[illegible]をみ[illegible]うとも故郷のこと
を忘られをうてしうのうさなうまうう

又義経滅のうすみとうとうおぼく[illegible]
の人[illegible]の[illegible]別離苦悲歎苦とも
我[illegible]られて[illegible]ら[illegible]四苦八苦一として
[illegible]処も[illegible]すさしも[illegible]維[illegible]
とのやう九国の国を[illegible]
やの色とを立ちの[illegible]
仏のられをなりし[illegible]
上[illegible]月を八[illegible]乃堀[illegible]
[illegible]
[illegible]清盛中将の歌を[illegible]源氏の[illegible]

能面をも維摩の為小長谷の綱よりひき
寄魚のごとくに引きくへゆのしたの新へさ
うを作りへこうつの方なるをかりそとて海
よりたゆひ〳〵そうをの事人ゆゑすて作りひとは
のようて日ゑくこと紙の中まて敷をあの
をみつき物をなけきて作法法師なとも
なし道作法を海ゑんとすれとも水なきを
とゑくす大海よりとい魚ともうかなれ
を飯事なし是鐵器為はとりとうおかを作
ひとつ金山水鍋不とくの我が勝しうを一八

の人くが文なをけてゑ作ゑらひしう一
答とりやうて一門の人をゆ色てうきむ
ねとの作を教をけくいくかろひうう
合道衣衆等を引うをて鐵をけへて方ふま
とひ四てもくきてゑ軍よりひの多れ多
ゆゑ事もなうつてうを修羅は闘諍帝釋の
うつうひも見よをゑとうとうを見さふ
らひし一答は珍法きて仏釈を子う
をくきを書を交る約分奥よ約する事をを敵
の五つを肝をけ一きをの松よむきへ驚かし

源氏の譜りゐて小弦屋をさして土壇浦とのぶ
るて軍をそふを限とみるるの二位尼中
納言とさゆるひき男女命乃いきのこらん
事八十餘の一も生かさて殺ひ逆さゆるを
を生弦川ちとといふとも親るの後生を訪
らん事もあらかるむ叫ちるを女を殺さ
ぬなるひなれをりのまをしてはるつくを
上の浮業捨をとふらひまるの後生をも
助給へとやひしる為れ如くに笑を叫
弦は風色と吹ものひ浮雲のつをたれ元の
兵ひとをまとうて夫運拙なくて人の力すを及
難し況ようとて見くしるを二位尼を奉
抱きまいらせて紅に出一河あをきまるる浮
ものうをゆるて抑尼をひまをは沈らへを
しをゆうんとするるを作れい二位尼源氏
はるくくと流いてをなきを見るむひ
ゆるをて夫をつるをきるしめをれさふらを
をやあをの十善戒行の浮ちるるようて
今義家八主とをひをれを殺給へをも逆源
おひのまを浮運すをる逆さを殺ひ給へ

ぶつ来るひのうちを祈く伊勢大神宮より
のうけをおくりまゐらせのち西の向ををがく西
を浄土に来迎か新のごとくにしたがひ
しかも浄金佛さまのらふてしき國をしうさ
累をてうへも極楽浄土とて目お度所へを
志すいをを作ふうや泣く逢かうさとさき中
たつるる山嶋父の清安ひんつゆを
きのて清なみるみ初めてきちいきう嶽しき
清ををうしきを之来るひのうをせをひて伊勢
大神宮る清鉢中さ祈ひそ祈くち西の向
をを祈ひて清金佛をうるる二位殿先帝
を抱ていをて海かしみ宮殿もくれ
んもさきして忘れん思すれを忘られを
思うんとすれとも志のうれをのあり面る
人々乃れの系ちをひうさ面を叫喚大
叫喚ほのかの庭に西人も見るをるとと
うなほく泣ひ一のさて教主のうをな
きたとうれて上るひ一ほる播磨國
四石浦とのやる笑てちとまとろみるる
笑に苦の四意をを適るまさるる所を

帝釋好奇をもて一門の人々皆ゆゝしきを
多羅僧をいとなみ袈裟出でゝ乞ひ取りて
みな色をなしいたくとゝのへ同じ法の
二位尼と知りて法花経文城と云ひ一時
めでたかりける事ひとしなみなき
うと同じひしりを誇言高雄の中より見くて
いとゝ結ぶ法花経助きめと申と云ふて
義門のめをのちをこと法師ふと念仏して
法華業捨をとゝひまるられみる六巻か
ようとうけとうあるべく作人と申さ勢法人

法皇作なりける長國人会特三義わさとを
の為に乞ふを見我物の日義上人を義至指
現の法力よりて乞ふをみてとうと義
つまものの為に法師人きゝるそのり
ひとうとて法源を流させ給へて法を
代人にも皆神をうるなるまりる女院も法
なみる法流を紛て附属をうる如房
達も神をそのうまはけるを指小麻皮院
達代拝をふを言ひとおたゝき夕陽西に
ひとふけて法名誦を付示をすれてしめさ

[illegible]れとも浮かみてさくさくとして還浮たり
をなひたりなれはそのむしりそやとも食
出さ数のひたりん思ひあへぬ浮源は袖乃志
うゝみきさあるをさ数浮うゝ乃を遠
よ浮覚し遠て墨浮もの潮をさ数たゝへてを
浮ゝ曽よりのうをを折くを子を灵一門を縁
成ゝ立見せいれ至中さをせぬひ者り見をう
ゝまつ東よ向をせぬて伊勢太神宮八幡
宮供祢まをおゝまゝを子奉筆千社参獻と
うゝはりりゝさをぬひゝにとをれう色て

面小むのうをせ結ひて[illegible]古霊霊丞一佛ゝへ
と祈らをぬふうゝうゝをれ女房浮源子
よ二首の歌をそのうはきまけう
ゝのうゝをいれなるひてうのうのうく乃
ゝのうゝや人のあひしるうん
いゝゝつもゆのよなわうゝとなれを
たゝものあみゝもひさうゝしか
又法華経浮供ゝ作ゝをれけう徳大寺左大将
実定つ浮奉宮ゝ柱よ書付られ者ゝとのや
いゝゝへ乃貝ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

そのひのまなこ
やまへのさと
ゆ
ゆく
ゆすをのうま
しうつ〳〵うつて事
とを聞つゝ
をてゆかみそくはしを
をもふなをゆ山
ほとゝきを
三ゆをとほまでとゝ
いとらとなをたゝ
つまもうゑをゑ
抑環浦すてつこゆく捕と
人武を首ゆをて大
子ゑゑゆれて意海を
飯人の女房達ゆ
数ゑこゝうひ
ゆ思ひをゆゑ
てゝうをこさまれ
ても風しつのなる
うゆりとまてもち
ゆゆなるゝ
ゝつゆやしなひゑて
ら月の
ゝをゝ入
ゝ人

苑花流刑名度候ける折ふしは海につけてまゐ
おほしめしつゝ天下なり父祖は菩提の
子孫にをくらふといふことをうらみ給ひなし
とてみえこのみまゐるとて女院をもすゝめ
遠月路をくらき道の上にほとり給ひらひ侍
らくらか来るの勢ひてうらめしき給ひしの
日ころよりたえまなきあふさことなれは
佛は侍るは五色のいとをひの色にして南無
西方極楽世界教主阿弥陀如来あやまらす
を浄土へみちびき給へとて念佛あまた

うし大御所は佐渡院にて法住にならひ
てけふそのきざみは侍名残の折しきたにおなし
き侍るをひなひたり念佛は拝やうしくよ
ちうをましくそれは西にむかひて紫雲たなびき異
香室にみちて音楽をきこえゆかきありある
侍ことなれは建久二年二月の中旬に一
筋侍ねるをましらをのひかたかはの侍くら
ぬるまゝ何ごとも絶え果ててましくて佐つまの
しうる別路の侍ときわ至るまなくそてにおも
られけるは女房達をむつしのゆめの中のさと

きみの遠くてくるあもなきかなれば
ひとくの浮世はいとなきめふうりて
きたる遠をそうめくも詩女うの宮人に
紙をひ章撰希文人のあるに姓生の悪懐
をとけるとそうはけなきもる
手乾物沼灌頂巻

弘前図書館
古典籍

3年 7-2-2